短大における街なかキャンパスでのアクティブラーニングの試み

Attempt of active learning Program on the Machinaka campus in Junior college education

川田　博美[*1]・稲吉由味子[*2]・千葉みどり[*3]
Hiromi　KAWADA[*1]
Yumiko　INAYOSHI[*2]
Midori　CHIBA[*3]
*1 名古屋女子大学短期大学部
*1 College of Nagoya Women's University
*2 愛知工科大学自動車短期大学
*2 Aichi University of Technology Automotive Junior College
*3 地域貢献ボランティア協会
*3 Volunteer Association of Regional Contribution
Email: kawada@nagoya-wu.ac.jp[*1]

あらまし：生活系短大生を対象とした「協働型サービスラーニング」の手法の導入による「社会人基礎力」育成のためのプログラムの展開実験を進めてきた。「協働型サービスラーニング」の多くが、「学内での学び」を基にして、学生の「自発性」と「ボランティア精神」による「学外での学び」を保証する取り組みであるが、本学科のプログラムの特徴は、学外での活動における協働型サービスラーニングの実践ではなく、それを学内で実施するイベントにより実践している点であった。それをこれまで選択履修による 1 専攻単位で実施してきたが、2013 年度より、学科単位で必修履修とすることになったことを受けて、このプログラムにこれまでの倍以上の学生を収容する必要が出てきた。そのため、1 つのイベントでは収容しきれず、複数のテーマに分散させることを目的として、「社会人基礎力」の項目により決めた「選択パターン」を設定したうえで、運用を開始した。さらに、2014 年度からは、学びの場としての『街なか・サテライト（アクティブ・キャンパス）』を学外などに求め、本学科各コース専修者としてふさわしい専門性の保証と学生個人の能力アップを目指した『生活学科アクティブ・ラーニング・プロジェクト』を展開し始めた。その概要と方向性を報告する。

キーワード：短大教育，協働型サービスラーニング，社会人基礎力育成，アクティブラーニング

1.　はじめに

文部科学省が説明する「アクティブラーニング」とは、教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称である。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である[(1)]。

「アクティブラーニング」とは、いわゆる「能動的な学習」のことで、学生の教室内外でのアクティブな学習姿勢のことでもあるように思われるが、その実現のために提供される学習環境の提供形態に意義があると考える。それは、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等の学習形態の提供をはじめ、特徴的に学内外で提供される学習環境も含むものである。つまり、「アクティブラーニング」の実現には、教授側が「学習者の思考を活性化させるための環境」をいかに提供できるかどうかにかかっているともいえるであろう。

「社会人基礎力」の育成と関連付けた「アクティブラーニング」プログラムとして、これまで、本学科（名古屋女子大学短期大学部生活学科）では、他大学（愛知工科大学自動車短期大学）や地域団体（地域貢献ボランティア協会）との『協働型サービスラーニングの実施』を目標として、教科「バーチャル・カンパニー演習」をカリキュラム内に設置して、地域貢献のためのイベントの運営と実施をその教科の内容として取り組んできた[(2)～(4)]。2011 年度の入学生に対しては、「協働型サービスラーニング」の強化を図るために、地域貢献ボランティア団体と連携して、セミナーによる「ボランティア」と「社会人基礎力」の育成プログラムと「学外でのボランティア活動実践」プログラムとしての地域貢献ボランティア活動への課外活動との仲介を実験した。この取り組みに参加する学生には、いわゆる「サービスラーニング」の核心の 1 つともいえる学生本人の自発的な参加が必要である[(5)]。2012 年度からは、これまで 1 つのテーマで実施してきたこの取り組みに、複数のテーマを設定することによる、プログラムの選択制を導入した。教育目標を「社会人基礎力」の育成として明確にし、そこに示された「3 つの能力」によりテーマを設定し、関連する教員がそれぞれ示した内容により、履修するプログラムを選択するものである[(6)]。約 120 名を対象としたその実験を経て、2013 年度からは、10 名の教員によるテーマを約 170

名が選択して取り組む1年次必修科目『地域貢献演習』をスタートさせた[7]。

ここでは、「協働型サービスラーニング」の発展形として、2014年度より地域貢献ボランティア団体と連携してスタートした新たな「アクティブラーニング」の学習環境を提供する、いわゆる「街なかキャンパス」について、その内容を報告する。

2. 教科『地域貢献演習（入門・基礎・実践・応用）』

教科『地域貢献演習（入門・基礎・実践・応用）』は、短期大学での正課の授業で「社会人基礎力」を育むための実践的な取り組みにリンクした形で2013 年度よりの新カリキュラムで設定したものである。1年次の2セメスタは、必修科目として短期大学部生活学科（生活情報コース、食生活コース、生活創造デザインコース）の学生が全員履修する。

教科『地域貢献演習』を「協働型サービスラーニング」の場としていく目的と期待されるその効果としては、

(1) 短大の1、2年生を対象に実施することで、学生一人ひとりが自らにとって将来必要な学習の意味を確認し、地域や社会問題への関心を広げ、グループでの協同学習で基礎的な力をつける。

(2)実践的な情報技術教育への導入教育としてモチベーションを高めるとともに、ＩＴ環境への理解を深め、より実践力の高い専門職養成を図る。

(3)大学と地域団体との連携によるコミュニケーション教育プラットフォームを構築することで、効果的な協働型サービスラーニングのプログラム開発および評価体制を構築する、ことなどがある。

３. 街なかキャンパス『COCO キャン・タウン』

このプログラムは、教科『地域貢献演習（入門・基礎）』の必修科目としての取り組みを終えた2年次の学生を対象として、2 年次には選択科目となる同教科の後半（実践・応用）で「アクティブラーニング」プログラムの学びの場として提供するものである。本学科の各コースで提供する特徴的な『生活学科アクティブ・ラーニング・プロジェクト』プログラムの中の一つでもあり、本学科各コース専修者としてふさわしい専門性の保証と学生個人の能力アップを目指している。街なかキャンパス『COCO キャン・タウン（こころとこころでふれあい街なかキャンパス・タウン）』は、生活情報コースで提供するプログラムであり、主に、生活情報コース2年の学生が参加する。毎月1回、名古屋市中心部に近い観光名所『鶴舞公園』内に、ライブステージを中心にしたテント村を設置し、各テントをブースとして学生たちが構成する「チャレンジチーム」が企画運営するイベントを実施したり、学生の作品や調査報告などを展示する。2014年6月に第1回を実施し、学生が企画運営する子供向けゲームやフリーマーケット、「協働型サービスラーニング」として実施する各種イベントの案内ブースなどで、公園利用の観光客や地域住民などに向けたサービスを提供した。テントを利用する各ブースの企画や検討、制作などは、教科『地域貢献演習（実践・応用）』で設定された「チャレンジチーム」で活動展開し、毎月1回実施するこの街なかキャンパスで自分たちの企画を世の中に問う。実施後は、教科内で「振り返り」を行い、次の『COCO キャン・タウン』で、再度試行することを繰り返す。

4. おわりに

教科『地域貢献演習（実践・応用）』で設定された「チャレンジチーム」としては、①春待ち小町（本学で実施する地域の子供向けイベント）プロモーション、②春待ち小町マルシェ（学外で実施する地域の子供向けイベント）プロモーション、③ゆるキャラプロモーション、④オリジナル弁当プロモーション、⑤COCO キャン・タウンプロモーション、⑥春待ち小町アネックス（新たな地域で実施する地域の子供向けイベント）プロモーション、⑦オリジナルグッズプロモーション、⑧ミュージックライブプロモーション、⑨ニューウェーブプロモーション、⑩オリジナルフーズプロモーション、⑪フリーマーケットプロモーションがあり、それぞれのチャレンジチームで検討を重ねた企画ができ次第、逐次ここで自分たちの企画を世の中に問うていく。今後の実施を通じて、試行錯誤を続けながらも、この取り組みの「学習環境としての効果」の可能性を追求していく。

参考文献

(1)中央教育審議会（2012）:『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』、2012年8月28日、文部科学省

(2)川田博美、箕浦恵美子、佐藤優（2010）: “イベント実施により協働型サービスラーニングを目指す教科の展開”、教育システム情報学会第35回全国大会講演論文集

(3)川田博美、箕浦恵美子（2011）: “協働型サービスラーニングの実現に向けての教育システム構築の可能性”、名古屋女子大学紀要(人文･社会編)第57号

(4) 川田博美、箕浦恵美子、佐藤優（2011）: “協働型サービスラーニングを目指す教科に求める学習効果”、教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集

(5) 川田博美、稲吉由味子、千葉みどり（2011）: “地域貢献ボランティア活動とリンクした「社会人基礎力」を育成する教育プログラム導入の試み”、教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集

(6)川田博美、箕浦恵美子（2012）: “「協働型サービスラーニング」をめざす教科の「社会人基礎力」を育成する教育プログラムとしての可能性”、名古屋女子大学紀要(人文･社会編)第58号

(7) 川田博美、稲吉由味子、千葉みどり(2013): “「社会人基礎力」の育成を目的として地域貢献に取り組む教育プログラムの試み”、第3回研究会講演論文集